

『天主実義』の研究(五)：第五篇現代語訳

柴田, 篤
九州大学文学部

<https://doi.org/10.15017/2328429>

出版情報：哲學年報. 59, pp.1-24, 2000-03-10. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



『天主実義』の研究(五)

——第五篇現代語訳——

柴 田 篤

はじめに

本稿は前稿に引き続き、イエズス会士マテオ・リッチ（中国名は利瑪竇、一五五二—一六一〇）の『天主実義』を現代語訳したもので、今回は下巻の冒頭にある第五篇を取り上げる。上巻においては、「天主」とは何であるのか、人間の「靈魂」とはいかなるものか、万物の存在はどのように捉えるべきか、といった根本問題が論じられていたのに対して、下巻では倫理上の諸問題について様々な議論が展開される。第五篇は、第四篇の末尾で中士が、「人魂が不滅で他の物に変化することがないことは既に説明をお聴きしました。仏教の輪廻六道・戒殺生の説は聖（なる天主の）教には関係がないと聴きます。（このことについて先生は）必ずやお教えになられるでしょう」と述べた言葉に答えたものとして配置されている。すなわち、「仏教の輪廻六道・戒殺生といった誤謬の説を弁析排撃して、斎戒の正しい目的を掲げ示す」（弁排輪廻六道戒殺生之謬説而掲斎素正志）というものである。リッチはここで仏教の所説を正面から弁難しており、後半ではカトリック的戒律の一つとも言える大斎・小斎の意義について説明している。その部分は、リッチ著『畸人十篇』の第六「斎素正旨非由戒殺」にも引用されている。第五篇は、仏教思想によつてもたらされた輪廻説や殺生戒が批判されているため、当時の思想界に大きな反響を呼ぶことになる。なお、仏教に関し

てリッチは、既に「天主実義」第二篇で「空」について批判したほか、第三篇の4、第四篇の16でも取り上げている。彼の仏教観は、その「報告書」第一の書、第十章にまとめられているが、その中でも輪廻説や殺生戒に論及している。

【注 釈】

- (1) 拙稿「天主実義」の研究（一）―序説と首篇現代語訳―（『哲学年報』第五十四輯、一九九五）、「天主実義」の研究（二）―第二篇現代語訳―（『哲学年報』第五十五輯、一九九六）、「天主実義」の研究（三）―第三篇現代語訳―（『哲学年報』第五十六輯、一九九七）、「天主実義」の研究（四）―第四篇現代語訳―（『哲学年報』第五十七輯、一九九八）。
- (2) 雲棲株宏の「天説」（『竹窓三筆』）「聖朝破邪集」巻七、虞淳熙の「天主実義殺生辨」（『聖朝破邪集』巻五）、羅川如純の「天学初聞」（『聖朝破邪集』巻八）、また「辨学遺稿」（『天学初函』）等を参照。
- (3) マッテオ・リッチ「中国キリスト教布教史・一」（『大航海時代叢書』第Ⅱ期 第8巻、岩波書店、一九八二）。本稿の「注釈」における「報告書」からの引用は、すべて同書の川名公平氏訳による。

【凡 例】

- 一 底本は、台湾学生書局「中国史学叢書」所収明版影印本「天学初函」による。
- 二 便宜上、中土と西土の各発言の冒頭に、順に番号を付した。中土が奇数、西土が偶数となる。
- 三 訳語については、以下の点に注意した。
 - (1) 「天主」は、現在、日本のカトリック教会においては「神」と訳すが、原語のまま用いた。
 - (2) 「中土」は中国の士大夫を、「西土」は西洋の学者即ち修道士を指すが、煩瑣になるので原語のまま用いた。
 - (3) 儒学、殊に朱子学の概念・用語については、そのまま用いたが、必要に応じて説明を施した。
 - (4) その他の表現については、できるだけ平易な現代語表記を心掛けた。
- 四 訳文中、「（）」は原文にない語を補ったところを、「（）」は説明を施したところを、それぞれ示す。
- 五 中国語として熟さない用語については、原文を注記した。その外、必要に応じて注釈を施した。
- 六 現代語訳に当っては、拙稿「天主実義」の研究（二）序説所掲の訳注書等を参考にしたが、特別な場合を除き、一一注記はしなかった。

現代語訳『天主実義』下巻

第五篇「(仏教の)輪廻六道や戒殺生といった誤謬の説を弁析排撃して、齋戒の

正しい目的を掲げ示す」

1 中士が言った、「人間(の生と死)に関しては三つの考え方があります。一つは、人は前世の形跡かたちによつて生まれるのではないのだから、死んだ後に何かの形跡を残すものでもない、というものです。⁽¹⁾ もう一つは、そもそも前世と来世と現世の三世が存在するのだから、自分が現世で獲得する禍福はすべて前世で行つた善惡に由るものであり、来世で遭遇する吉凶はすべて現世で行つた正邪に関わるものである、というものです。⁽²⁾ このたび先生から伺いました御教えでは、人は現世に暫く寄留して永遠の住みかである来世を決定するものであるから、暫しの現世で専ら徳を修め善を行つて、来世において常に「その報いを」受けるようにすべきであり、この現世の行為が道路を行くことであれば、その来世の報いは本家に到着することであり、「また」現世の行為は功績を立てるようなもので、来世の報いは賞与を受けるようなものである、とのことだす。⁽³⁾ そもそも来世に関する議論が正しいのであれば、前世の議論も拠り所があるのでしょうか」と。

2 西士が言った、「古代、我が西方にピュタゴラスという学者がいました。⁽⁴⁾ その才知優れた人柄は人に勝るものがありました、正直さにおいては、十分ではありませんでした。いつも民衆が憚ることなく惡を行うのを痛ましく思っていましたので、自分の名声を利用して奇妙な議論を作つて、彼らが惡を行うのを禁じました。その説はこうです。不善を行う者は必ず来世において再び生まれて報いを受ける。艱難や貧賤の家に生まれたり、鳥獸の類に生まれ変わったりする。暴虐な者は虎や豹に、驕傲な者は獅子に、淫色な者は犬や豚に、貪欲な者は牛や驢馬に、盗人は狐

や狸、山犬や狼、鷹や若鷹などに生まれ変わる。必ずやそれぞれの罪惡に應じて生まれ変わる。この説に対して、學識のある人は明確に「その意図は立派であるが、その發言は欠陥を免れない。惡を阻むには正しいやり方がある。どうして正しいやり方を捨てて、まちがったやり方に従うのであろうか」と言いました。⁵ピュタゴラスが亡くなつて以後、その發言を繼承する門人は多くありませんでした。その時期に、彼の發言はたちまちにして国外に漏れ、インドに伝わりました。仏教徒は新しい説を打ち立てようとして、この輪廻の説を繼承し、これに六道の考え方を加え、ありとあらゆるでたらめを説き、書物を編集して經典としました。⁷数年後、中国人がインドに渡つてこの經典を伝えました。これがその「三世六道輪廻説の」來歴であり、信すべき真実の傳承も、依るべき真実の道理もまったくありません。⁸インドは取るに足りない土地で、中国と同等ではありません。礼樂制度もなければ徳行の氣風もありません。諸國の文書も殊更このことを問題にもしていません。どうして広く世界に示すに足る説と言えるでしょうか」と。

3 中士が言つた、「〔先生が〕伝えられた『坤輿万国全圖』⁹」を見ますに、上は天の運行角度に対応して、いささかも違ふところがありません。まして、遠くヨーロッパから中国に來られているのですから、述べておられるインドの國についての知識はきつと真実で、彼の國はそのように卑賤な所でしょう。世間の人は仏典を読んで、誤つてその國が淨土であると信じ、甚だしきに至つては早く死んでその國に生まれ変わることを願う者もいるありさまです。誠に笑うべきことです。我が中国人は、遠くの異なつた土地にまで出掛ける習慣がありませんので、それらのことについていつでも詳細には知りません。しかし、たとえ土地は辺鄙で、人は卑賤でも、もしその説くところが道理に適つていれば、どうしてこれに従うのに問題がありませんよう」と。

4 西士が言つた、「そもそも輪廻説が道理に背く理由は数えきれないほどです。ここでは、主なものを四つ五つ挙げることにしましょう」。

第一の理由。もし「亡くなった」人の魂が他のものの身体に移り住むことで、この世に生まれ変わり、別の人間や

他の動物になるのであれば、きっとその本性の靈妙さを失わないはずで、前世の行為を記憶しているに違いありません。しかし、私は全く記憶していませんし、そんなことを記憶している人のことなど聞いたこともありません。ですから、前世などないことはきわめて明らかです」と。

5 中士が言った、「仏教や老莊の書物に書かれているものには、「前世のことを」記憶している者が非常に多いですから、「前世のことを」記憶している者は確かにいるのです」と。

6 西士が言った、「悪魔⁽¹⁰⁾が人を誑^{たが}そうとして、その人に付きまとっているのです。それで、人や獣の体に取りつき欺いては、お前は某家の子どもであると告げ、その家のことを述べて、でたらめを（本当のことであると）証明することがあります。こうしたことを記載しているのは仏教や老莊の徒で、仏教が中国に入った後のことにすぎません。あらゆる地方のあらゆる種類のものが、数限りなく生まれては死んで、昔も今も変わりがありません。「それなのに」仏教徒以外の他の国や他の宗派においては、聖賢が広く深い学識を備え、千巻万句を記憶しているのに、どうして前世のたった一つのこととも記憶していないのでしょうか。人はとかく忘れやすいのですが、自分の父母のことを忘れ、あまつさえ自分の姓名を忘れるなどということがありましようか。仏教や老莊の徒や動物だけが「前世のことを」記憶して語ることができるでしょうか。そもそも戯れごとを語って人々を欺けば、聴き従う者もいるでしょうか、優れた人物が大学などで「学んで」理に適っているか否かを論ずれば、笑いかつ誹らない者はいないでしよう」と。

7 中士が言った、「仏教では、人の魂は鳥獣の体にあつても、もとより前世の靈性を維持しているが、その体と一致しないので、それにとらわれて「靈性を發揮して道理に」到達（して前世のことを語ったり）することができないのである、と主張します」と。

8 西士が言った、「魂⁽¹¹⁾が」他人の体になれば、本体（である魂）は（その体と）一致してします。どうして前世のことを記憶していないことがありましようか。私は以前、人の魂が靈妙であることを明らかに説明しました⁽¹¹⁾。そもそ

も靈妙なものは本来の機能を行うのに体に依存しませんから、たとえ鳥獸の体にあつても本性である靈妙さを働かせることはできるのです。どうして「靈性を發揮して道理に」到達できないことがありましょう。もし天主が輪廻によつて人や他の動物に変化することを設定したのであれば、きつとそれによつて善を勧め惡を懲らす「ため」でしょう。もし私が前世で行つた善惡をはつきり覚えていなければ、現世で出会う吉凶が前世に依るものであるということがどうしてわかりましょうか。そんなことで善を勧め惡を懲らすことができましょうか。そうであれば、輪廻を説くことに何の意味がありましょう。

第二の理由。天主が人間や鳥獸を創造した際、罪を犯した人間を鳥獸に変えるようなことはしないで、それぞれの種類に固有の魂を賦与しただけです。⁽¹²⁾もし今の鳥獸が人の魂を備えているのであれば、今の鳥獸の魂は昔の鳥獸の魂とは異なつたものであり、今は靈妙だが昔は愚鈍であつたということになります。しかし、そのような違いがあるなど聞いたことはありませんから、今の「鳥獸の」魂は、昔のものと同じものなのです。

第三の理由。道理に明らかな学者は誰でも、魂には三段階があると論じています。⁽¹³⁾下の段階のものを「生魂」と言います。これはそのものの生命が維持され成長することを助けるだけのもので、草木の魂です。中の段階のものを「覚魂」と言います。これはそのものの生命が維持され成長することを助ける上に、目で視、耳で聴き、口で味わい、鼻で嗅ぎ、肢体で物の実態を知覚することができるようになせるもので、鳥獸の魂です。上の段階のものを「靈魂」と言います。これは「生魂」と「覚魂」とを兼ね備えたもので、生命を維持し成長を助け、物の実態を知覚させる上に、そのものが事物を推論し理義を明弁することができるようにさせるもので、人間の魂です。もし鳥獸の魂が人の魂と同一であれば、魂には二種類しかないことになり、世の通説を乱すことになるでしょう。およそ物はその外貌によつてその本性が決定されるのではなく、その魂によつてこそ本性が決定されるのです。それ自体の魂があつて始めてその本性があり、その本性があつて始めてその種類が決定されるのです。そして、その種類が決定されて始めてその外

貌があるのです。ですから、本性の違いは魂の違いにより、種類の違いは本性の違いにより、外貌の違いは種類の違いによるものです。鳥獣の外貌が人と異なっているからには、種類も本性も魂もすべて異ならないことがありましようか。人が事物に即して道理を窮明する方法は他でもありません。表面に表れていることからその内面にあるものを明らかにし、現象を観察することによってその隠奥に到達するだけです。ですから、草木の魂が何であるのかを知ろうと思えば、それが成長するだけで知覚がないことを見て、その中に生魂だけがあるということを知ることができます。鳥獣の魂が何であるのかを知ろうと思えば、それが知覚するだけで理義を論じることができないのを見て、その中に覚魂だけがあるということを知ることができます。人間の魂が何であるのかを知ろうと思えば、人だけが万物の理義を論じることができのを見て、霊魂が存在することを明らかにできます。道理はこのように明らかであるのに、仏教では鳥獣の魂と人間の魂は共に靈妙であると説きます。何と道理を損なうものではありませんか。私は常々仏教の説に従って誤りを犯したということは聞きますが、道理に従って誤りを犯したということは聞いたことがありません。

第四の理由。人の体の状態が鳥獣と異なり優れて立派であるならば、その魂も異なっています。たとえば、大工が椅子や机を作ろうと思ったならば、必ず木を用いなければなりませんし、鋭い刃物を作ろうと思ったならば、鉄を用いなければなりません。作る品物が異なれば、使用する材料も異なります。人の体の状態が鳥獣と異なると分かっている以上、人の魂がどうして鳥獣と同じということがありましよう。ですから、人の霊魂が別の人の体に宿ったり、鳥獣の体に入ったりして、世の中を転生するなどという仏教の説が全くのでたらめであるということがわかるのです。そもそも人間は、自分の魂は自分の体のみ合致するもので、自分の魂が他人の体に合致するなどということがありえましようか。まして別の種類の体においてはいうまでもありません。やはり、刀が刀の鞘に合致し、劍が劍の鞘に合致するようなものです。どうして刀が劍の鞘にのみ合致するというようなことがありえましようか。

第五の理由。そもそも人の魂が鳥獣に変化する理由は他でもなく、「その人の」前世の邪悪な行為が、ある獣を真

似ているので、それで天主は彼を罰して、後世においてその獣にするのでしょうか。しかし、これは刑罰にはなりません。欲望のままに行つて、どうしてそれを刑罰と言えましょう。邪惡な人の情は普段、天から自分に賦与された不變の道^①を滅ぼして、自分の内に積もった惡を好き放題行つていても、それでも自分が人間の面貌を備えているから、「そのことについて」抵抗を感じ、恥じ入るものです。もし、来世においてその姿が變化して（獣になり）、自分勝手に思ひのままに行うことができるとしたら、どうして大喜びしないことがありますか。いつも残忍な殺戮を行つてゐる暴虐な者は、自分の体に鋭い爪や鋸のような齒が備わつて虎や狼になり、昼も夜も血で口を漱ぐと思われないことがありますか。いつも人を欺いて謙遜ということを知らない傲慢な者は、自分の体が大きくなつて獅子に生まれ変わり、百獸の王になることを喜ばないことがありますか。他人の財貨を盗んで生活している盜賊は、どうして自分が狐や狸に變化して、多くの巧^{たく}みや媚^もわしを身につけてその本性を満たすことを憂えることがありますか。こういった輩にとつては、獣に生まれ変わることが刑罰にならないだけでなく、むしろ恩賞となるでしょう。天主はこの上もなく公正で英明ですから、その刑罰がこのようなものであるはずはありません。もし人という高貴な種類から獸という下賤な種類に移ることが刑罰であると言うならば、惡を行う人は却つて人の類で生きることを貴いことだと思わないで、たいいてい人の道を修めずに獸のような感情のままに生きて、自分が人の顔をしていることを恥じるだけだと思います。（ですから）人の顔から脱け出して、醜い獸の顔になつたならば、恥じ憚ることなく自分の思いを遂げることができます。このようなわけですから、輪廻という荒唐無稽な説は、惡を阻み善を勧めるのに何の役にも立たないどころか却つて害惡をもたらすものです。

第六の理由。戒殺生を説く者は、自分が殺した牛や馬が自分の父母の後の姿ではないかと心配して、それを殺すに忍びないだけです。もしそのように疑うのであれば、どうして平気で牛を驅つて田を耕したり車を引かせたりするのでしょうか。どうして平気で馬をつないでこれに乗つて道を行くのでしょうか。思いますに、親を殺すことと田を耕すた

めに苦勞させることと、その罪は大して違わないでしょう。親を殺すことと鞍をつけて街の中で鞭打って辱めることとは同様です。しかし、『現実には』農作業をやめるわけにはいきませんし、家畜を働かせるのを省くわけにはいきません。ですから、どうして戒殺生の説（が不合理で実行することなどできないこと）を疑うことができません。人は禽獸に生まれ変わることができると言うことなど、とうてい信じることはできません」と。

9 中士が言った、「そもそも人の魂が鳥獸になることができるなどというのは、全くでたらめな言い方で、無知な人々を欺くだけのものです。学識のある者は自分が乗っている馬が自分の父母や兄弟・親戚や君主・師友であるなどということをしてどうして信じるでしょうか。そのことを信じながら平気で馬に乗っているならば、それは人倫を乱すものであります。また、もしそのことを信じて馬に乗らないのであれば、家畜を養うことをやめてしまつて、世の中の役に立たないようにすることで、これでは人はどうにも動きが取れなくなりです。ですから、そうした説を信じるわけにはいきません。しかし、もし輪廻したのち他の人に生まれ変わると言うだけであるならば、それは同類ですから問題がないように思えますが」と。

10 西士が言った、「人の魂が鳥獸に変化できるという説を信じるならば、家畜を使用することをやめることになりす。人の魂が他の人の体に変化できるという説を信じるならば、婚姻の礼や他人を使用することなどに障害を生じ、行ふことが困難になるでしょう。なぜならば、あなたが娶る女性が、あなたの亡くなった母親が来世で別姓の家の娘に生まれ変わった姿でないと誰が分かるでしょうか。（また、）あなたが使用している従僕や罵り責めている凡庸な人物が、あなたの兄弟・親戚や君主・師友の来世の姿でないと誰が分かるでしょうか。これも、大いに人倫を乱すものと言えるでしょう。要するに、人の魂が鳥獸に変化できないならば、他の人に変化できないことも、道理からして全く明らかなことです」と。

11 中士が言った、「以前、『先生は』人の魂は不滅であり、死者の魂は〔全て〕一緒に実在するとおっしゃいました。⁽¹⁸⁾

（しかし、）輪廻によってそれらの魂を変化させて消滅させなければ、宇宙の中にそんなに多くの魂を容れておくことなどできようか、と疑う者がおります」と。

12 西士が言った、「そのように疑う者は、天地の間の広大さを知らない者であつて、だから、すぐに充滿してしまふと考えるのです。また、靈妙な存在（靈魂）の性格や実態を知らない者で、だから、充滿する所があると考えるのです。形体のあるものは（一定の）場所に存在するから、ある場所に充滿することがあります。（しかし、）靈妙な存在（靈魂）は形体がありませんから、どうしてある場所に充滿することがあります。〔穀物〕一粒位の大きさの所でも、一万もの靈魂が存在します。過去の靈魂ばかりではなく、将来の靈魂もすべて容れることができるのです。（ですから）このことを理由にして輪廻などという妄論を為す必要がありますでしょうか」と。

13 中士が言った、「輪廻の説は仏教や老莊から出たもので、我々儒者はほとんど信じません。しかし、殺生を戒めるのは〔儒家で説く〕仁〔の考え方〕に近いと言えます。天主は慈愛の根源であるのに、どうして〔この説を〕否定なさるのですか」と。

14 西士が言った、「もし人が本当に鳥獸に転生するのであれば、学識のある人は小さな動物を殺すのでさえ人間を殺すかのように戒めるでしょう。姿形が違つていても、同じ人間であるからです。しかし、このようなでたらめな説を信じることで、〔毎月〕一日と十五日に齋戒を行つて、殺生を戒めるのはやはり道理の通らないことです。たとえば、毎日人を殺してその肉を食べている人が、仁愛の気持ちに立ち返つて、〔毎月〕一日と十五日には人を殺してその肉を食べることをやめて、ほかの日に人を殺してその肉を食べよう」と言つたならば、これを〔殺生を〕戒めたいと言えましようか。その人が二十八日間平気で人を殺すのであれば、二日間の戒めはその惡の極みを増やすことになるでしようか、それとも減らすことになるでしようか。そもそも私は鳥獸に転生する道理などないということを証明しましたが、あわせて殺生を戒める道理などないということを明らかにしましょう。試しに考えてご覧なさい。天

主が天地や万物を生み出すのに、一つとして人の役に立つために生み出さないものはありません。そもそも太陽や月や星は、天に並んで我々を照らすのに、たくさんさんの色を照らし出して我々に見せてくれますし、万物を生み出して我々の役に立てようとしめます。五つの色（青・黄・赤・白・黒）は私の目を悦ばせ、五つの音（宮・商・角・徴・羽）は私の耳を樂しませ、様々な味や香りは私の口や鼻を甘美にし、多くの柔らかなで暖かい物は私の肢体を安らかにし、多くの薬剤は私の病氣を治療し、外は我が体を養い、内は我が心を調えます。ですから、私たちはいつも「それらを生み出した」天主の尊大な恩を感じて、折々にそれらを謹んで用いるべきです。鳥獸に備わっている羽毛や皮革は、衣服や履物にすることができまし、貴重な牙や角や殻は、すぐれた道具を作ることができます。「また、」妙藥によつて病氣を治したり、美味しいもので老人や子どもたちを育てることができます。「ですから、」どうしてこれらを取つて使わないことがありましようか。もし天主が、人が牛・羊や犬・豚を「殺して」料理することを許さないでいて、それらに美味を与えているのであれば、無駄なことをしていると云えないでしようか。人が「殺してはならない」という命令を犯すように誘惑し、罪に陥れていると言えないでしようか。また、昔から今まで、多くの国の聖人賢者は誰でも生きものを殺してその肉を食べ、しかもそのことを後悔もせず、戒律に背くものとも見なしていません。それなのに、聖人賢者を地獄に墮ちる罪を犯した者と見なし、大・小斎をするだけで徳もない二、三の連中を天国に昇ることができる者と称賛してよいでしようか。そのようなことは道理に通じた者の言葉であるはずがありません」と。

15 中士が言つた、「この世界には、人間に利益を与えず、むしろ害を与える物が沢山います。毒虫や蛇や虎や狼のような動物です。天主が万物を生み出しているのは、すべて人の役に立たせるためであるとおっしゃっておられるのは、間違っているのではないでしようか」と。

16 西士が言つた、「物の実体は幻妙で、その働きは広範なものです。ですから、人はそれらの全てについて理解す

することはできず、かえって害悪（の面だけ）を見ます。これは人間の才能が不十分であるからにすぎません。人間には二つの面があります。一つは「外なる人」と言い、これは身体のことです。もう一つは「内なる人」と言い、これは精神のことです。この二者を比較すると、「内なる人」が尊大です。毒虫や虎や狼は、「外なる人」を危うくして「内なる人」を穏やかにしていますから、人に利益を与えろと言うことができます。そもそも身体を傷つけるものは、世間では「悪い物」と言いますが、私たちが天主の怒りを畏れるように懲めるものであり、天災や水災や火災や動物などによって人が命令を犯すのを責めるものであることを知らせるものです。ですから、私たちは（天主に対して）畏れ慎んで、折々にその助けを祈り求めたり、思い願ったりしないわけにはいかないのです。（そういうわけで、身体を傷つけるものは）人の内面を正すための大きな助けでないことがありましようか。また、天主は凡庸な人間の心がひたすら地上の物に向けられ、現世だけにとらわれていて、天国やより高い来世のことを悟り望み見ることを知らないのを悲しみ痛んで、それで害毒をもたらす善くないものを同時にこの世に置いて、人間を救い出そうと思っておられるのです。まして、天主はこの世界を創造された時、世界中の万物を我々の役に立つように養生したり利用したりするようにして、決して害を与えないようにされたのです。（ところが）人間が天主に逆らったために、万物は人に逆らうようになったのですから、「人間に対する」害毒は天主の当初のお考えではなく、人間が自ら招いたものになりにません」と。

17 中士が言った、「天主が生き物を生み出されるのは、その生を愛してその死を望んでいないはずですから、殺生を戒めることは天主の尊い御旨に合致するものではありませんか」と。

18 西士が言った、「草木も生魂を受けており、（鳥獣と）同じように生き物ですが、あなたは野菜を取って食べ、薪を折って火を炊き、草木の命に対して残忍なことをしながら、きつと『天主はこの野菜や薪を生み出して人間の役に立てて下さっているのであり、これを使って何の悪いことがあるか』と言うでしょう。それならば私も言いましよ

う、「天主はあの鳥獸を生み出して私たちに使わせておられるのだから、それを殺して人の命を養っても、どうしても悪いことがあるか」と。仁の模範については、「他人が自分に対してしてはしくないことは自分も他人に対してもしようとするな⁽²⁵⁾」と言っているだけで、「鳥獸に対してしようとするな」とは言っていません。また、世の中の法律は、もっぱら人を殺すことを禁じているだけで、鳥獸を殺すことを禁じたものではありません。そもそも鳥獸や草木は財貨と同じように使われますが、使い方に節度があれば十分なのです。ですから、孟子は「目の細かい網は池や沼に入らず、斧は適当な時に山林に入れる」と君主に示しているのであって、⁽²⁶⁾「網や斧を」用いないというのではなく、「⁽²⁷⁾」と。

19 中士が言った、「草木は生き物ではありませんが、血もなく知覚もなく、鳥獸とは異なります。ですから仏教徒は、これを殺しても悲しむことがないのです」と。

20 西士が言った、「草木は血がないと言うのですか。それは、赤い色のものが血であることを知っているだけで、白いものや緑のものでも血でないことはないということを知らないのです。そもそも世の中で形体を持って生きているものは必ず「その体が」養われなければなりません、養われるためには体液が存在しており、体液の流れはすべて血です。どうして赤いものだけに限りましょうか。試しにご覧なさい。水生動物のうち海老や蟹などは赤い血がありませんが、仏教徒はこれを食べません。野菜のなかにも赤い液体がありますが、仏教徒はこれを食べることを禁じません。そうであれば、どうして鳥獸の血だけを重視して草木の血を軽視するのでしょうか。また、知覚を持つ物を殺さないのは、その動物が痛みを感じるからにほかなりません。私たちが本当にその動物の痛みを望まないのであれば、殺さないだけでよいでしょうか。もしそれらに労役を課するのであれば、よいわけはないでしょう。牛が野を耕したり、馬に人が乗ったりということは、終身の災を免れません。どうして痛みが長く続かないことがありましょう。これを殺す時の一瞬の痛みに較べれば大いに違います。まして、犠牲を殺すことを禁じるのは、かえって犠牲（とな

る鳥獸」を害なうものです。思いますに、鳥獸は人の役に立つものです。ですから、人はこれを飼育します。飼育すると鳥獸は益々増えていきます。もし、人の役に立てないのであれば、人はどうして養いましう。朝廷にあつては差し当り必要のない官職は削り、家庭にあつては無能な下僕はやめさせます。まして「役に立たない」鳥獸については言うまでもありません。西方の人は豚を食べるのを憚りますから、⁽²⁹⁾ 国中に豚がいけません。世の中が皆西方の人のようになつたならば、豚の類は滅んでしまふでしょう。ですから、あるものを愛すると、かえつてそのものを害することになります。「逆」にあるものを殺すと、かえつてそのものを生かすことになります。犠牲を殺すことを禁じるのは、犠牲（となる動物）を養う方法を大いに害なうことになります」と。

21 中土が言った、「そうであれば、齋戒は行う必要がありませんか」と。

22 西土が言った、⁽³⁰⁾ 「殺生を戒めるために齋戒を行うのは、小さな憐れみの心にすぎません。しかし、齋戒には三つの目的があります。この三つの目的を理解すれば、齋戒が益々切実で崇高なものになるでしょう。

〔第一の目的〕そもそも世の中には、今日は賢明だが以前も愚鈍ではなかつたという者は余りいません。今日は道理に従っているが以前も道理に違わなかつたという者は余りいません。道理というものは、天主が〔人の〕心に刻み込むために、聖人賢者に命じてこれを石板や書冊に書きつらねたもので、この道理を犯す者は天主に対して罪を得ることになります。⁽³²⁾ 罪を得ることになる道理が尊ければ尊いほど、罪は益々重いものとなります。学識のある人はたとえ善に立ち返つても、前に罪を犯したことを平気で行うことができるでしょうか。人は以前行つた不善を赦して追及しなくても、折々に思い出し、恥じて後悔します。もし自分が以前失敗したことを深く後悔しなければ、どうして今後その失敗を免れることを望めましよう。まして、学識のある人は今行う善を自分では満足せず、自分の短所を〔視力の勝れた〕離婁⁽³³⁾のように「鋭く」見ぬき、「二方」自分の長所を目の見えない人のように見「て意識しないようにす」るのです。自分自身にあるものを精細かつ深刻に責めますから、他人が「自分のことを」俊傑であると称賛して

も、自分自身は身の置き所がないほど恥じ入るものです。自分が氣に病むことについて精密かつ詳細に振り返りますから、他人が「自分のことを」実に立派であると言ったとしても、欠点がある者のように自らを修め慎むものです。「ですから」どうして言葉だけでへりくだるでしょうか。どうして心だけで後悔するでしょうか。深く恥じ入るならば、どうして欲楽に耽^{ふけ}ることなどができましようか。必ず食事を減らし、肉食を除いて、淡泊な食事を取るでしょう。およそ自分のためには粗末なものを選んで用い、自らを苦しめ責めて、自分の犯した過去の罪や新たに犯した罪をつぐなおうとして、朝に晩に恐れかしこみ、天主の下に額をつけ、「自分の罪を」悲しみ痛み、涙を流して、自分の罪が赦されることを願うのです。どうして、むやみに自ら聖人ぶって罪がないことを誇ったり、むやみに自分「の罪」を赦して、他人がその誤りを裁くのを待つことなどありましようか。ですから、自ら責め正していささかも赦さない場合でも、天主は憐れみ傷んで「これを」赦して、再びその罪を問わないことがあります。以上が肅戒の正しい目的についての第一の説です。

〔第二の目的〕そもそも徳の働きは人間の本来の働きです。徳についての説を聴いて喜ばない者はなく、速やかにこれを行おうとするものです。ただ、私欲が発動すると、人心⁽³⁴⁾を奪い取って好き勝手を行い、「人心は」抑え付けられて憤り抵抗することが困難になります。おおむね平素行うことは、その「私欲の」働きに使われるだけになります。ですから、行うことは道理の命令に従ったものではなく、私欲が楽しむことに従っているだけです。その表面を見れば人間ですが、その行いは鳥獸と何ら異なることがありません。思うに私欲の楽しみは、道理に敵対するもので、知慮を塞ぎ理性⁽³⁵⁾を眩まし、徳と断絶します。この世界に蔓延する病気で、これよりひどいものはありません。他の病気の被害は肉体に及ぶだけです。私欲の害毒は心の奥まで到達し、本性⁽³⁶⁾を破壊します。もし道理に敵対するものによって心が支配されるならば、道理はすぐに滅んでしまい、徳は居るべき場所がなくなってしまう。ああ、私欲の楽しみは微細ですぐになくなるものですが、しばしば心に深い後悔を残すものです。小さく短い楽しみでもって永

久の憂いを買うのは、賢いことではありません。しかし、私欲は自分の肉体から力を借りてその勇猛さを増し加えます。ですから、その私欲を抑えるには、先ず自分の肉体の気を制限しなければなりません。道理を学ぼうとする者が、欲を寡なくしようと思ひながら、かえつて「ぜいたくな食事で」肉体を豊かに養うというのは、火を弱めようと思つて更に薪を加えるようなもので、できるわけがありません。学識のある人が飲食しようとするのは、生命を保持するためですが、凡庸な人が生命を保持しようとするのは、飲食するためだけです。そもそも本当に道理に志すのであれば、我が肉体を仇敵のように厳しく見るものですが、「生命を保持するために」やむをえず肉体を養うだけではなぜ「やむをえず」と言うのでしょうか。私たち（人間）は本来肉体のために生きているわけではありませんが、肉体がなければ生きることができません。そこで、食べ物を食べて腹の飢えを満たすための薬とし、飲み物を飲んで口の渴きをいやすための薬とするだけです。一体誰が薬を飲むのに、病気を治すために必要なことを基準としない者がありましょう。我が性の好むものを少なく「摂取」してこそ「私欲は」治めやすいもので、味は多くの種類があつて甘いものですが、満足することはありません。思いますに、私欲の願ひは人を養うためなのですが、しばしばかえつて人を傷めますから、「飲食は武器よりも沢山人を殺す」と言うことができます。ここでは、肉体を害うことについては触れず、心を害うことだけを取り上げます。従僕が健康を害えば、その主人に逆らうことになるでしょう。血氣が強すぎると、志を傾けることになるでしょう。志が傾くと五つの欲³⁷が惡の限りを尽くしますが、中でも色欲が一番です。豊かな（食べ物の）味が腹を満たさなければ、どうして色欲は起こりましょう。淡泊な飲食では色欲は減退します。肉体が治まれば、様々な欲望も自然に治まるものです。以上が齋戒の正しい目的についての第二の説です。

〔第三の目的〕そもそも現世は苦しみの世界であつて、喜びを求める世界ではありません。天主が私たちをこの世界に生かしているのは、休む間もなく道理を修めることを促しているのであつて、この肉体を喜ばせるためではありません。しかし、私たちは結局のところ、多くの〔肉体的〕楽しみを止めることはできません。清い楽しみがなければ、

必ず淫らな楽しみを求め、正しい楽しみがなければ、必ず邪な楽しみを求めらるゝものです。それを得れば、これを失います。ですから、学識のある人はいつも自己の心を修めて、道徳のことを快楽とし、憂い苦しんで外のことには期待することがないようにします。また、常に肉体の楽しみを省いて、それが心に浸透して本来の楽しみを奪い取ることを心配します。そもそも徳の楽しみは靈魂の本来の楽しみです。私たちはこの楽しみにおいて天使と等しい存在なのです。飲食の楽しみは肉体のひそかな楽しみです。私たちはこの楽しみにおいて鳥獸と等しい存在なのです。私たちは徳行の楽しみを心に増せば増すほど、益々天使に近づきますし、飲食の楽しみを減らせば減らすほど、益々鳥獸から遠ざかります。ああ、慎まないでよいでしょうか。仁義（の徳）は人の心を明らかにしますが、五つの味は人の口をにぶらせます。⁽³⁾善を積み重ねる楽しみが強ければ、大愛心に良く、体にも害がありません。贅沢な食事の楽しみが頻繁にあると、身心共に深く害われます。肉食で腹を満たすと、必ず墮落して自分の志が汚濁に墮します。このようになれば、どうしてその心を塵埃の中から引き出して高邁な志を起こすことができましょう。悪を行う者は他人の楽しみを見て、自分にそれがなければ妬んだり嫌ったりします。善を行う者は他人（のそのような姿）を見ると、かえって憐れみへりくだって、『彼は汚賤のことに従いながら、このようにそれを好み、このように熱心にそれを求めている。私は最上の教えに志しているのに、少しもそれを味わうこともできなければ、少しもそれを備えることもできない。このように怠けてしまつて努力しないでよいであろうか』と思います。世人の災いは他でもありません、心が病んで徳の良い味を知らないだけです。その味が分かれば、美食を軽視することができ、自分でその（徳の）楽しみを得ようと言うでしょう。この（徳と美食の）二つの味は、互いに人の心に入り出して、同時に住むことのできないものです。これ（徳の味）を入れようと思うなら、先ず彼（美食の味）を出さなければなりません。

昔、西国に二匹の獵犬を「王に」献上する者がいました。どちらも優秀な犬でした。王は一匹を國の高官の家に預け、一匹を郊外の農家に預けて、それぞれ飼わせました。やがて犬が成長したので、王は獵に出かけてこの二匹を試

してみました。二匹とも勝手に狩り場に入りましたが、農家で飼った犬は体は瘦せて身も軽く、鳥の跡を嗅ぎつける
と素早く走って、数えきれないほど鳥を捕まえました。「二方」高官が飼った犬は肥えて見かけは見事ではありまし
たが、肉食十分で体が安逸になれていたため走り廻ることができず、鳥を見ても振り向かず、道端の腐った骨を見つ
けてはこれを咬み、咬みおわると動かなくなっていました。狐に従っていた者たちは、その二匹が同じ母犬から
生まれたということを知って怪しみました。王は言いました、「怪しむには足りない。獣だけのことであらうか。人
も同じことが言えよう。すべて育て方によるだけだ。快樂と満腹によつて育てられると、必ず善に向かうことはない。
労働と儉約によつて育てられると、あなたの期待に背くことはない」と。⁽⁴⁰⁾つまり、人は御馳走に慣れると、礼義のこ
とを考える暇がなく、ひたすら食に走るだけですが、精微なる理義に慣れると、飲食の楽しみに遇う暇もなく、ひた
すら理義のことばかり考えてそれに従う、ということです。以上が齋戒の正しい目的についての第三の説です。

そもそも齋戒には色々な方法があります。私は世界の多くの国々を巡って、そのことについて詳しく聴いておりま
す。食物の種類には関係なく、昼間だけ断食して夜になるとあれこれ食べる、というのを「時齋」と言います。時間
には関係なく、肉食を断ち、野菜は随時食べる、というのを「味齋」と言います。食物の種類や時間には関係なく、
一日に一回しか食べない、というのを「残齋」と言います。回数や時間や食物の種類に制限があり、昼に野菜を一度
食べるだけで、陽に属する肉の食事を禁止して、陰に属する魚は禁止しない、というのを「公齋」と言います。煮て
食べるのを禁止して、終生洞穴で野草の根だけで生きる、こういう人はヨーロッパの山中に非常に沢山いますが、そ
ういうのを「私齋」と言います。しかし、これらの齋戒は、すべて自己を抑制することであり、その人やその人の体
の状態を見て決めなければなりません。富貴の人が美食を普段の量より減らすのも齋戒とすることができですが、貧
しい家の者はいつも粗食に慣れていますから、齋戒とすることはできません。そうでなければ、物乞いをする者は最
高の齋戒とすることができます。また、その人の体力を考慮しなければなりません。体力が衰えたり病氣である者は

滋味で体を養わなければなりません。肉体労働をする者は、四肢を動かすために、長い間空腹であるわけにはいきません。ですから、天主教の制度では、六十歳以上の老人や二十歳以下の若者、病気の者や乳児や肉体労働の従僕はいずれも斎戒の対象に入りません⁴²。そもそも食物を制限する斎戒は、本当の斎戒ではなく、末節のことです。斎戒の真意を求めてみると、すべて私欲を抑えるためであって、熱心かつ十分に行わなければならないものです。ですから、斎戒を行いながら、慎み戒めることをしないというのは、「掘りだしたままの」あらたまを持つていながら、それが玉であることを忘れていようなもので、無知ということですよ」。

23 中士が言った、「何とすばらしい御忠言⁴³でしようか。本当に斎戒の正しい目的です。中国で通常、斎戒を行う者は、貧乏の故に斎戒を行って慎ましく暮らしているか、あるいは「それによつて」良い評判をかすめ取つて、ひそかに人を欺く者か、どちらかです。「後者は」大勢の人の前では斎戒を行いますが、独りになると酒色に耽り、怒りに任せ、不義を行い、財貨に溺れ、賢者を侮り、善人を謗り、やりたい放題です⁴⁴。ああ、人の目は逃れることはできませんし、「まして」天主をごまかすことなどできません⁴⁵。幸いなことに「私は」御高説を拝聴することができました。どうか私の疑問がすっかり解けますように、更に「ご教示を」お願いいたします」と。

24 西士が言った、「道理は奥深く、かつ広いものです。博く問わなければ、要領を得て守り行うことはできません⁴⁵。詳しく問うことは誠意のある証拠です。どうして「質問されることを」氣に病む必要がありますでしょうか」と。

【注釈】

（一）儒学は基本的に生まれ変わりの考え方を持たない。死後の鬼神の存在にしても、善悪が禍福をもたらすという考え方にしても、生まれ変わりを想定してはいない。

（二）仏教の所謂三世因果論である。輪廻転生、因果応報の考え方である。

- (3) カトリックの人生観を指す。「天主実義」第三篇において、西士が説いている内容である。同篇2を参照。
- (4) 原文では「開他臥刺」とある。古代ギリシアの哲学者 Pythagoras のこと。紀元前五三〇年頃活動し、宗教結社・ピュタゴラス教団の祖とされる。三世紀のディオゲネス・ラエルティオスの「ギリシア哲学者列伝」第八卷第一章（岩波文庫「ギリシア哲学者列伝（下）」、加来彰俊訳、一九九四）によれば、イタリヤ派の哲学の創始者とされる。彼は自分がヘルメス（神）の息子アイタリデスが何代にもわたって生まれ変わったのちの姿で、その間のすべてのことを記憶している、と常々語っていたという。また、彼は人間の魂は肉体から肉体へ転生すると考えていたという。さらに、「魂に関してはわれわれと共通な権利をもつ動物たちを、食べることはもとより、殺すことさえも禁じていた」という。
- (5) 具体的に誰の発言であるかは不詳。
- (6) 仏教において、有情が善惡の業因によつて六種の世界に趣くという考え方。六道とは、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上のことである。
- (7) 「天主実義」第三篇の4では、西士が、仏教の天堂・地獄の説は天主教の説を剽窃したものであると批判している。
- (8) リッチは「報告書」第一の書、第十章（本稿「はじめに」参照）の中でも、中国における仏教について次のように述べている。「とりわけこの地に広まったのは、魂が肉体から肉体へ移転するという説であり、これはピッターゴラ（ピタゴラス）の説に他の多くの作り話を付け加えて、いかにもまことしやかな説に仕立てたものだ。」また、同書の第九章では、子供を殺す悪習を取り上げて、「こうした残酷な行為に広く道を開いているのは、当地では魂は肉体から肉体へ移動するという説が信奉され、子供を殺すのはかえって子供に善いことをするのだという考え方があるからだ。すなわち、すぐにどこかの金持ちの家に生まれるので、貧乏をしてさまざまな苦勞を味わわずにすむからだ。」と述べている。
- (9) マテオ・リッチはヨーロッパ製の世界地図を中国に伝え、一五八四年には漢字を用いた世界地図「山海輿地全図」（現存せず）を盛慶で出版し、大いに反響を呼ぶ。一六〇二年に李之藻が序文を書いて「坤輿万国全図」として出版した。以後の地理観に多大な影響を与え、地理学的发展にも大いに寄与することになる。舘沢信太郎氏「地理学史の研究」（愛日書院、一九四八。原書房再刊、一九八〇）を参照。
- (10) 原文には「魔鬼」とある。「天主実義」第四篇の14を参照。
- (11) 第三篇の10〜12において、西士は人魂が靈妙である理由を挙げている。
- (12) 第三篇の6を参照。
- (13) 「旧約聖書」の「創世記」第1章に、「神は水に群がるもの、すなわち大きな怪物、うごめく生き物をそれぞれに創造された」（21

節)、「神はそれぞれの地の獣、それぞれの家畜、それぞれの土を這うものを造られた」(25節)、「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された」(27節)とあるように、神が人や鳥獸を「それぞれに」創造したということである。以下、「旧約聖書」及び「新約聖書」からの引用は、すべて日本聖書協会発行の「聖書」新共同訳(共同訳聖書実行委員会編、一九八七)による。

(14) 原文には「三品」とあり、以下「下品」「中品」「上品」とある。魂に三段階があること、及び人魂の性格については、第三篇の6以下に詳述されている。

(15) 原文には「格物窮理」とある。もともと「格物」は「大学」に「致知は格物に在り」とあり、また「窮理」は「周易」に「理を窮め性を尽し以て命に至る」とある語であるが、特に朱子学においては、事物に即してそれぞれに内在する天理を究明し、自己の知識を拡充する工夫を表す言葉として慣用化された。

(16) リッチの「報告書」第一の書、第十章には、「だが、文人たちの適切な指摘にもあるように、この宗派(仏教)は、誤りだけ他の宗派に比べれば理性に即した教えを説いただけに、これが広めた誤りも含めて、人びとに与えた害毒もかえって大きかった。」とある。

(17) 原文には「己棄彝」とある。「毛詩」大雅蒸民篇に、「民の彝を棄る、是の懿徳を好む」とある。

(18) 「天主実義」第三篇を参照。

(19) 「孟子」梁惠王上篇の中で、齊宣王が犠牲となつて引かれていく牛に対して「罪なくして死地に就くが若きに忍びず」して、羊を以てこれに代えようとしたことに對して、孟子は「是れ乃ち仁術なり」と答えている。

(20) 原文には「慈之宗」とある。「天主実義」第三篇12に、「天主至智至仁」とある。

(21) 原文には「斎素」とある。自己を戒め慎しむために、飲食を制限することを指し、ここでは「斎戒」と訳す。カトリックにおいては、戒律の一つである「大斎・小斎」にあたる。これは、「倫理的宗教的根拠からの一時的の、全体的又は部分的節食を指す」(「カトリック大辞典」「提」項、上智大学編、富山房刊、一九四〇)言葉で、断食ないし節食のことである。

(22) 原文には「魂神」とある。

(23) 「外なる人」「内なる人」は、原文には「外人」「内人」とある。「新約聖書」の使徒パウロの書簡に次のように見える。「コリントの信徒への手紙二」第4章には、「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々に新たにされていきます」(16節)とある。また、「ローマの信徒への手紙」第7章には、「「内なる人」としては神の律法を喜んでいます、わたしの五体にもう一つの法則があつて心の法則と戦い、わたしを、五体の内に

ある罪の法則のとりこにしているのが分かります。…このように、わたし自身は心では神の律法に仕えていますが、肉では罪の法則に仕えているのです」(22-25節)とある。

(24)「旧約聖書」の「創世記」第1章27-30節に次のようにある。「神は御自分にかたどつて人を創造された。神にかたどつて創造された。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の土を這う生き物をすべて支配せよ。」神は言われた。「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。地の獣、空の鳥、地の土を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」そのようになった。」

(25)「旧約聖書」の「創世記」第3章によれば、神が人に対して食べることを禁じていた園の中央に生えている「善惡の知識の木」の果実を、蛇に誘惑された女が食べ、更に男も食べるることによって、人間は神の言葉に背く。このことに対して神は、女には「お前は、苦しんで子を産む。お前は男を求め、彼はお前を支配する。」(16節)と言ひ、男には「お前に対して土は茨とあざみを生えいでさせる、野の草を食べようとするお前に。お前は顔に汗を流してパンを得る、土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に返る。」(18-19節)と言ふ。こうして人間は「エデンの園」を追放される。最初の人間がこのように神に背いたことを「原罪」と呼ぶ。

(26)「論語」顔淵篇に「仲弓、仁を問う。子曰く、…己れの欲せざる所、人に施す勿れ。…と」ある。また、「論語」公冶長篇に「子貢曰く、我、人の諸を我に加えんことを欲せざれば、吾も亦諸を人に加うること無からんと欲す、と」とある。

(27)「十誡」の第五誡に「母殺人」(人を殺してはならない)とある。陽瑪諾の「天主聖教十誡直詮」(一六四二年)には、「天主がこの誡を立てるにあたって、『殺す母れ』とだけ言わずに、必ず『人を殺す母れ』と言つたのは、人を殺すのは罪であるが、犠牲(となる動物)を殺すのは罪ではない、という意味である」とある。同書では更に、「輪廻は惡を沮むに足らず」、「輪廻は物の理を悟めず」、「輪廻は倫を滅ぼす」などと、輪廻説批判が展開されている。

(28)「孟子」梁惠王上篇に「數罟、洿池に入れざれば、魚鼈勝けて食らうべからざるなり。斧斤、時を以て山林に入れば、材木勝けて用うべからざるなり」とある。孟子が梁の恵王に述べた言葉の一節である。

(29) イスラム教徒のこと。リッチは「報告書」第一の書、第十章の中で、中国におけるイスラム教(回教)徒について触れ、「豚肉を食べないのは、その習慣がないからだ。」と述べている。

(30) 以下に述べられる齋戒の三つの目的については、マテオ・リッチ著「畸人十篇」の第六「齋素正旨非由戒殺」にもほぼ同文が見える(「第二の目的」の部分)。「天主実義」の方に一段落程度の省略が見られる。冒頭の部分を以下に訳出する。「李水部(李之

- 漢)が席を設けて私(リッチ)を招いた。その日は教会(の暦)の斎日に当たっていたので、私は菜食であつた。李氏が言つた、「あなたのお国では仏教を信奉せず殺生戒もないのに、あなたが斎戒なさるのはどうしてですか」と。私が答えていった、「どうして私の国だけのことでしょうか。中国でも仏教が入る以前、(夏殷周の)三代の時代、全く仏教を信奉しておりませんでした。常に太牢(牛羊家の供え物)によつて上帝に仕え、殺生を戒めることは全くありませんでした。しかし、祭祀を行う前には、散斎や致斎を行いました。(これらの)斎戒を行う者は、全く酒を飲まず、くさい野菜を食べませんでした。今見るところ、士大夫は郊社の大典に当つて、悉く酒肉を断つて、官舎に居ります。このように、斎戒の意義は、仏教によつて始まるものでもなく、犠牲を殺さないためでもないことは明らかです」と。李氏が言つた、「しかし、吾が儒教で祭祀を行う場合に斎戒するのは、(自己の)心志を齊一にして、自らを淨め、神靈に應對するためです。あなたのお国の斎戒はどういう意味がありますか」と。その時、私はたまたま箴言の中に一帙の旧稿を入れており、その中には天主教の斎戒の三つの意義が説かれていた。すぐに取り出して、これを(李氏に)見せた。その文章は以下の通りである。『殺生を戒めるために斎戒を行うのは、小さな憐れみの心にすぎない。しかし、斎戒には三つの目的がある。……』ここで言う「旧稿」とは、『天主実義』の草稿のことであらう。末尾は以下の通りである。「李氏は説みおわると、『これこそ斎戒の本当の目的です。吾が儒者はこれに従うべきでしょう』と言ひ、感謝してこれを記録した。」
- (31) 原文には「道」とあり、「道理」と訳したが、ここでは「天主の命じた戒め」すなわち「おきて」を指す。
- (32) 「聖人賢者」とは、ここでは「旧約聖書」の時代の預言者を指す。「道」すなわち「おきて」は、「十戒」や多くの律法のこと。
- (33) 上古、黄帝の時代の人で、百歩離れた所から毛先を見ることができたと伝えられる。「孟子」離婁上篇等に見える。離朱とも言う。
- (34) ここで原文に言う「人心」は、第三章の9において「獸心」と対比される「人心」と同じ意味で、「靈妙な本性(道理)」に従う心」のことである。
- (35) 原文には「理髮」とある。
- (36) 原文には「元性」とある。
- (37) 色欲・声欲・香欲・味欲・触欲を指す場合と、財欲・色欲・飲食欲・名欲・睡眠欲を指す場合とがある。ここでは後者か。
- (38) 「老子」第十二章に「五色は人の目をして盲ならしめ、五音は人の耳をして聾ならしめ、五味は人の口をして爽(さう)わしむ」とある。
- (39) 「周易」乾卦の文言伝に「積善の家に余慶有り、積不善の家に余殃有り」とある。
- (40) この寓話と類似の話は「イソップ寓話集」(中務哲郎訳、岩波文庫、一九九九)【第一部】九二「二匹の犬」に見える。
- (41) 原文には「天主公教」とある。「公教」は「カトリック(普遍的)教会」を意味する。

(42) 以上のような天主教の斎戒（大斎・小斎）の守り方については、潘国光の『天主十誠勸諭聖蹟』（一六五四年）卷三の第三誠「守瞻礼之日」に詳しく見える。

(43) 原文には「法語」とある。『論語』子罕篇に「法語の言は、能く従うこと無からんか。之を改むるを貴しと為す」とあり、過失がある場合に正道をもつて忠告し正すことを意味する。

(44) リッチは「報告書」第一の書、第十章で、「彼らは肉やその他の生き物を食べることが禁じているが、誰も肉食をやめる者はいない。この罪にしても他の罪にしても、人々が施しを行えば簡単に赦してしまうし、彼らが祈祷を行えば、たとえ地獄からでも思うがままに逃れられると約束している。」と述べている。

(45) 原文には「約守」とある。『孟子』公孫丑上篇、尽心下篇には「守約」という言葉が見える。「守ることが要領を得ている」という意味。また、『論語』子罕篇には「我を博むるに文を以てし、我を約するに礼を以てす」とある。